

**論 文 審 査 の 要 旨**

筆頭著者（学位申請者）氏名

佐々木 貴浩

主論文の題目

題 目 Benefit of Single-Incision Laparoscopic Cholecystectomy—A Comparison to the 4-port Method—

(単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術の有用性—4点法との比較—)

および

掲載誌 Journal of St. Marianna University 2014: 5: 23-28

掲載・審査委員名

主査 中村 治彦

副査 津川 浩一郎

副査 宮入 剛

[論文の要旨・価値]

単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術(single incision laparoscopic cholecystectomy, SILC)は2012年の本邦全国統計で4042例に施行され、4点式腹腔鏡下胆嚢摘出術(laparoscopic cholecystectomy, LC)と比較して手術創の整容性に優れ、今後さらに普及すると予想される。単孔式では臍部を切開してport孔とし、ここから複数の処置具を挿入して手術操作を行うため、術後に臍部を縫合閉鎖すると、腹壁にはほとんど創が残らないことになる。2009年3月以降の新術式導入後に施行したSILC182例を、導入前のLC77例と比較し、SILCの手術成績を多面的に評価した。両群の患者プロフィールは、平均年齢がLC群において有意に高かった(53.4歳 vs 59.9歳)が、男女比、BMI、総胆管結石の既往などに差はなかった。手術時間、出血量、術中胆汁漏出頻度、開腹術への移行率、合併症発生率は両群に差がなく、SILC群では有意に術後平均在院日数(6.4日 vs 7.9日)が短く、かつ術後鎮痛剤使用回数(1.3回 vs 1.7回)が少なかった。以上よりSILCは胆嚢摘出術に対する現在の標準術式であるLCと比較して手術の安全性に遜色なく、その低侵襲性から入院期間の短縮と疼痛の軽減に寄与すると結論された。本論文はSILCの有用性を従来法との比較の上で明らかにしたものであり、臨床的価値が高いと考えられた。

[審査概要]

審査は平成26年9月22日に主査及び副査2名のもとで行われた。PCを用いた約25分間の発表の後、35分間の質疑応答では、①LCとSILCの症例ごとの術式選択のポイント ②術中胆道造影施行の有無とその理由 ③胆道損傷などの重篤な合併症の可能性 ④術後の臍ヘルニアを予防するための工夫 ⑤術者の熟練度によって患者の受ける不利益の可能性やそのICの方法 などについて質問があったが、おおむね適切な回答が得られた。

**最 終 試 験 結 果 の 要 旨**

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

研究内容の発表とその質疑応答をとおして、学位申請者の研究推進能力、専門的知識、研究意欲などについて問題がないものと判断した。また、英語読解力は参考文献の一部を和訳することで評価し、十分な読解力があると判断した。以上より、申請者は学位授与に値すると評価した。